今昔物語ふぁんたじあ（続）

杉本苑子

続今昔物語(こんじゃくものがたり)ふぁんたじあ
杉本苑子(すぎもとそのこ)
© Sonoko Sugimoto 1978
昭和53年 5 月15日第 1 刷発行
昭和63年 4 月25日第16刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131474-2 (1)

続 今昔物語ふぁんたじあ

杉本苑子

講談社

目次

沼のほとり　七
出離　二一
犬がしらの絹　三七
馬にされた商人　五九
鷲の爪　七五
婢女　八九
碁仙人　一〇一
榎屋敷の女　一一七
狩人と僧　一三三
銅の精　一四三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

笛を砕く　一五九
指の怪　一八一
父を喰った男　二〇二
きつね妻　二二三
五位の休日　二三九
あともどり谷　二四三

続今昔物語ふぁんたじあ

沼のほとり

1

東どなりの空き家に、人が住みついた。丹生の雄鳥と名のる二十七、八の青年である。
「どうか、よろしく」
と、隣づきあいを始めるにあたって、玉女の家にも、礼儀ただしくあいさつにきた。箔置きを、手職にしているという。
「どんなことをするのかしら、箔置きって……」
弟の千幡に、玉女は訊いてみた。
「木彫りの仏体や、屏風、色紙形なんぞに、金銀の箔を貼りつける仕事じゃないのか」
「むずかしそうね」
「根がいるよね。金箔なんて、紙より薄いそうだもの、息をつめるようにして貼るものらしいよ」
ほとんど家にこもりきりなのに、なんでもよく知っている弟だと、玉女は感心する。
「でも、そんなこまかい手仕事をするひとには、見えないわね」
「職人というより、武者みたいだね」
背がたかく、肩のがっしり張った、雄鳥はいかにも健康そうな、たくましい身体つきをしていた。

顔だちも、きりっと緊って男っぽい。眼の配りがやや、するどすぎるのが、はじめはとりつきにくかったが、笑うと、精悍さが消えて、したしみやすい、きさくな印象に変わる。

口かずは、すくない。そのくせ雄鳥が、こまかいところにもよく気のつく、あたたかな性格の持ちぬしであることは、まもなくわかった。

「買いすぎてしまったんだ。食べてくれないか」

てれくさそうに言いながら、玉女の家の水屋口に、野菜や魚、ときには米、塩、醤のたぐいまで、雄鳥はさりげなく、置いていってくれるようになった。

「いやに、なれなれしいやつだなあ」

と、警戒を口にしたのは、千幡だった。

「家族はいるの？　雄鳥さんて……」

「いえ、独り者よ」

「用心したほうがいいよ姉さん、なにか下心があっての親切に、きまっているもの……」

腹だたしげにいう弟の、人みしりの強い性格に、さからうまいと、つとめながらも、玉女は反射的に頬にほてりをおぼえ、あわてて顔をそむけた。

彼女はじつは、千幡とは逆に、隣人の好意がうれしかったのである。病弱な弟を女の細腕にかかえて、貧乏ぐらしに、疲れきっていたさなかなのだ。

九ツのとき、腰にはさんでいた草刈り鎌に落雷して、千幡は半身不随になってしまった。即死しなかったのがふしぎなくらいだが、いらい、どうやら動く片方の手足も、成長はいちじるしく遅れて、ぜんたいにコオロギさながら痩せほそったまま、一日のほとんどを、寝たり起きたりの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

状態で送っている。杖にすがれば、わるいほうの足をひきずってでも、歩けないことはないけれども、足萎だの、よいよいだのと、村の悪童たちにからかわれるのを口惜しがって、めったに外へ出てゆこうとしない。

姉の玉女は十八。千幡は、二つ下の十六……。頭はよく、読み書きもできる。寺の長老から仏典など借りて、だまって読みふけっている姿はたのもしかったが、また、玉女にすればそれだけに、どこか気むずかしく、扱いにくくもある弟の日常なのである。

麻布を織って、姉弟二人の生活を、玉女はけんめいにささえていた。日がな一日、機の前に坐りつづけても、手間賃は法外に安く、貧苦からぬけ出すことができなかったのに、となりに雄鳥が移ってきてからは、目に見えて毎日があかるく、ゆたかになった。

みなしごの姉弟に、雄鳥は同情をよせているが、優位に立つ者の哀れみと、それをとられないように、こころづかいしてくれているらしい。

「こんな柄、似合うかな」

やがては食物ばかりでなく、小袖や帯、鏡や櫛といったくらしに役立つ雑具まで、それもなかなか高価そうな品を、

「おみやげだよ」

と、持ってきてくれるようにさえなったけれども、雄鳥が家で仕事をしているのを、玉女は見たことがない。職人仲間がたまに出入りし、なにごとか打ち合わせたり、つれだって出てゆくのを見かけるばかりであった。

「京の仏師の家に寝とまりして、その工房で箔を貼るのだ」

と雄鳥は説明し、十日、二十日、ときには一ヵ月も家をあけることがある。
旅みやげは、留守番をたのむための礼がわりに、贈ってくれるのだが、
「よごれもの、たまったでしょ？」
玉女も返礼のつもりで、洗濯や縫い物など、なにくれと雄鳥の身の廻りの世話に心を配った。ささやかな手伝いでも、雄鳥に感謝されるのが、うれしくてならない。気持に張りができ、表情まで玉女はいきいきしてきた。
「姉さん、急に近ごろ、きれいになったね」
さぐるような眼で千幡は言う……。
「恋したんだろ？　雄鳥さんに……」
あきらかな反感が、その口ぶりには燃えていた。
「雄鳥さんも姉さんを好いてるよ。はっきり、おれにはわかる」
「そんなこと、あるもんですか」
ムキになって否定しながらも、玉女は知っていた。弟の察しの通り雄鳥もまた、自分を愛しはじめてくれている事実を、彼女は痛いくらい感じ取っていたのである。

2

隣り同士、独り身同士だ。若い二人が他人でなくなるのに、さほど時間はかからなかった。
二軒の家は村のはずれに並んで建ち、道をへだててだらだらくだりに、前は蘆原につづいていた。その先は、めぐり五丁ほどの沼である。鯉がい、鮒がいる。なまずが釣れ、うなぎも捕れた。

州を吹きわたる風が涼しい。
雄鳥と玉女は、蘆の葉のそよぎのかげによりそって、水禽たちのさえずりに祝福されながら熱く、固く、抱擁し合うひとときを、くる日くる日、飽きることなくたのしんだ。
「もう夫婦だよ。家を分けていることはない。晴れて一緒にくらそうじゃないか」
雄鳥の提案を、
「うれしいわ」
涙いっぱいな眼で、玉女も受けた。
「夫婦だと、おっしゃってくれたお言葉にすがって、わたしもうちあけます。あのね雄鳥さん」
指の先まで、玉女はまっかになった。
「わたしね、赤ちゃんができたらしいの」
「なんだって!?」
撓いそうな女の肩を、折れるかと思うほどの力で、雄鳥は抱きしめた。
「ほんとうかい？　玉女さん」
「たぶん、まちがいはなさそうだわ」
「そいつはすてきだ。でかしたぞ」
男の狂喜が、玉女にも夢のようなよろこびだった。
「じゃ、生んでいいのね」
「世帯を合わせよう。村の人たちにもこうなったら、二人の仲をはっきりみとめてもらうほうがいいからね」

「でも、弟が……」
あなたを嫌っているとは、あからさまには言いづらい。
「そうだ。わすれてた」
ふところから打ち紐のかかった小さな木箱をとり出して、雄鳥は玉女の掌にのせた。
「これ、ためしに千幡にのませてごらん」
「お薬？」
「唐から舶載された霊薬だ。珊瑚樹の粉末を練って作った丸薬でね、万病に効験があるそうだよ」
「万病に!?」
「唐物を扱う商人に手を回して、たのんでおいたんだ。千幡の身体をなんとしてでも、よくしてやりたいと思ってね」
玉女は、むせびあげた。
「ありがとう雄鳥さん、ご恩はわすれないわ」
「恩だなんて、水臭いことを言ってはいやだな。あんたの弟は、おれの弟でもあるわけじゃないか」
渡された高貴薬をにぎりしめて、玉女はとんで帰ったが、暗くなりかけた家のどこにも、弟のすがたは見えなかった。めったにないことである。
「千幡ッ、千幡ッ」
よびながらいま一度、表へ出たとたん、もどってきた弟と出あいがしらにぶつかった。

「あんたまあ、不自由な身体で、どこへ行ってきたの」
「寺さ」
杖を投げ出して、千幡はペタと框に腰を落とした。肩でぜいぜい息をしている。
「くたびれたのね。本を借りるなら、わたしが行ってきてあげたのに……」
ささえて、家の中へ入れてやりながら、
「雄鳥さんに、唐渡りの霊薬をもらったのよ。あなたの身体にも、きっと効くと思うわ」
玉女はいそいそ、木箱をとり出した。
「唐の薬だって？」
掛け紐をとき、ふたを払って、釉のかかった小さな壺から中身をつまみ出すと、
「やっぱりそうだ、あの雄鳥って人は、盗賊だよ姉さんッ」
千幡はやにわに、大声をあげた。
「ほら、ごらんよ、この、赤いきれいなつぶつぶ……。珊瑚だろ。朝廷の宝蔵から消えてしまった秘薬にちがいないよ」
「なんのことなの千幡、あなた、なにを言ってるの？」
「寺へいま、国庁の役人がやってきて、長老さまや村長に告げていたんだ。夜叉神丸とやらいう盗賊の一団が、ここ一、二年、都を荒らし廻っているが、ひと月ほど前、宮中の納殿を破って、衛府の官人を殺傷したあげく、かずかずの宝物をうばって逃げた。万一、うろんな噂をききこんだら、ただちに密訴して出よ、盗まれた品の覚えはこれこれと、触れ書きの写しを見せた中に、たしか珊瑚の薬もあったよ」

小きざみに、玉女はふるえだした。
「前からおれは、あの人を怪しいとは思っていたんだ。たかが箔置きのくせに、景気がよすぎるものね」
眼を血走らせ、千幡は気おい立って姉に命令した。
「さあ、この薬を証拠にそえて、姉さんいそいで、寺か村長の宅へ知らせに行ってくれよ」
「わたしにあの人を、訴人しろというの？」
つい、玉女の声はひきつった。姉の恋を、知らない千幡ではないはずなのに、なんという思いやりのなさかと、胸が滾ったのだ。
「そりゃあ気のどくではあるさ。でも、かかわり合いが発覚したら、ただじゃすまないよ。密告すれば功に免じてゆるされるけどね」
「いやッ、いやッ、わたしには訴人などできないわ」
「半病人のおれに行けというのか？　へとへとのおれに、もう一度、寺まで往復しろというのか？」
せきたてられ、むりやりに薬の壺を押しつけられて、玉女は仕方なく戸口を出たが、こっそり走りこんだのは、となりの雄鳥の家だった。

3

「そうか。こんな田舎にまで手が回ったか」
ゆがみ笑いに雄鳥は笑って、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton